

令和3年4月作成

被害者遺族手記集



島根県警察本部
犯罪被害者支援室

目次

交通事故被害者遺族手記

1. 42歳の真理子へ 2

平成11年12月26日、鳥取大学在学中だった学生4人が岡山県でクリスマスイルミネーションを見て帰る途中、鳥取県智頭町の国道で対向車線からはみ出してきた飲酒運転の乗用車に正面衝突され、4人のうち3人が亡くなるという交通事故が発生し、尊い命が犠牲となりました。

この事件で亡くなられた被害者である江角真理子さんのお母様の手記を写真とともにご紹介します。

2. 滉太へ 3

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第8集」より～

3. あの日あの時 5

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第8集」より～

4. 突然「生命」を奪われた息子 7

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第9集」より～

5. 息子への思い 9

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第10集」より～

犯罪被害者遺族手記

6. 今思うこと 11

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第8集」より～

7. 未解決の今を生きる 13

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第9集」より～

8. 人権救済すべきは加害者か、被害者か 15

～ 被害者支援都民センター発行遺族手記「もう一度会いたい・第10集」より～

9. 今私にできること 17

犯罪被害者遺族著作の童話

10. 彼岸花 20

～ 和歌山毒物カレー事件で10歳で亡くなった大貴君に、大貴君のお母さんが捧げる童話です。～

4 2歳の真理子へ

江角由利子

1999年12月26日、あの日から22年と言う歳月が流れました。

20歳だったあなたは42歳になっているはずですが、想像ができません。どんな仕事をして、どんな人と結婚しているだろうね。あの日、警察から「江角真理子さんのお宅ですか？驚かないで下さい。真理子さんが交通事故に遭われて入院されました。鳥取県立中央病院に来て下さい」との電話がありました。聞いても様子を教えてもらえなかった。怪我だと思いました。でも、電話があった時刻には、もう、この世にいなかったのです。愚かにも迎えに行けなかった事を一生、後悔しています。

長く通った心療内科の隣にリサイクルショップがあります。太ってしまったので、大きい服を買おうと寄って見たら、ピンクのドレスが高い所にボディに着せて飾ってありました。一回は店を出たのですが、どうしてもあなたに着せてやれなかった後悔から、引き返して思わず買ってしまいました。真理子のウエディングドレス姿が見たかった。顔の無いボディにこれを着せて、オブジェの傍に置く。それは母の切ない想いです。笑うでしょうね。あなたは。

そして、あなたの赤ちゃんが見たかった。抱いているのは京都の従姉妹の赤ちゃん。あなたが大学2年生の時に抱っこさせてもらったよね。もう、朱(あけみ)ちゃんは社会人になったんだよ。あなたは……今、どうしていますか？どこにいますか？あなたのお姉ちゃんは13年前、赤ちゃんを産んでお母さんになりました。そのお姉ちゃんに「母子手帳」と「へその緒」を渡しましたよ。孫は本当に可愛いです。あなたが生きていれば、命のバトンタッチが出来たのに……

あなたの子どもが見たかった、この手に抱きたかった。このウエディングドレスと、この写真は望みが叶えられなかった母の切ない思いの象徴です。どうか、この世の中でこんな想いをする人が居なくなりますように。夕べ、智頭の事件現場に置いて来た花の鉢植えが枯れそうだから、智頭町の人にお水をやってもらうように頼んだら、夜にわざわざ行って下さいました。そしたら、蛍が一匹、飛んで来たそうです。あなただったのかな？不思議だね。

もう一度、会いたい！
母より



いとこの赤ちゃんを抱いて



ウエディングドレス

滉太へ

中土 美砂

家族の目の前で、平成16年5月9日、午後1時5分に加害者の運転する暴走車に撥ね上げられて、皆に「バイバイ」してから、もう4年も経つんだね。その直前まで、お兄ちゃんのサッカーの応援で、にこにこしながら弟と遊んでいたのに。突然車がぶつかってきて、どんなにびっくりしたか。怖かったか。たとえ一瞬でも、ものすごく痛かっただろうに。守ってあげられなくてごめんね。4歳だった滉太、会えなくなって4年。もうすぐ滉太と過ごした月日と、滉太と離れている時間とが逆転してしまうんだね。そして、これからも、もうずっと会えないんだね。滉太は天国で家族を見守ってくれていると、頭では理解しようとしているけど、心の方は、やっぱり寂しい。寂しくて、会いたくて、会いたくてたまらない。でも、滉太は、一人で逝ってしまって、もっと寂しいよね。兄ちゃんも弟も、今でも「滉太に会いたい。タイムマシンが欲しい」って言っているよ。ふたりは、いつも間に立っていてくれていた滉太がいなくなって、二年間くらいはお互いにどう付き合ったらよいかかわからないみたいで、別々に遊んだり、たまに顔をあわせると喧嘩ばかりだったけど、今ではやっと二人で遊べるようになったよ。でも、滉太がいなくなって、まったく別の家族になってしまったみたい。皆で笑うこともあるけど、本当に「まん丸の幸せ」はもう、感じることはできないんだろうと思う。どこかが欠けている、ゆがんだ丸の幸せ、くらいはあるかもしれない。

加害者は刑事裁判で、「禁固2年、執行猶予4年」の判決だったから、その執行猶予ももうすぐ切れてしまう。滉太は帰って来ないけど、加害者はもとどおり。サッカーをやめていたお兄ちゃんも二年前からまたサッカーを始めて、弟も小学校でサッカーチームに入っていて、またあの現場のグラウンドに行くようになって、あの日と同じような光景を見ていると、やっぱり苦しくなって、悔しくなって、寂しくなって、気がおかしくなる。それと同時に、現場の近くに住んでいる加害者はどうしているんだろうって、どうしても考えちゃうよ。判決が出てから、電話の一本、手紙の一通すらなく、何の謝罪もない加害者。一年も経たないうちに、裁判所で命日を聞かれ、答えられなかった加害者。現場にお花を供えてくれている様子もない加害者。そんな加害者を、きっと滉太は恨んではないんだろうね。優しい滉太のことだから、きっと「もう、いいよ」って言っていそうな気がする。でも、滉太が許している気がしても、私たち遺された家族は、加害者を絶対に許せない。まだこれからもあの場所に行くかと思うと、加害者に会いはしないか、また、何か起きるんじゃないか、と怖い気持ちが湧き上がってくる。

刑事裁判では、交通事故の被害者の生命の軽さを思い知った。たとえ何年の刑罰が出て
も納得はできないけど、それにしても、軽すぎる刑罰。交通事故でも殺人事件でも、殺さ
れた、奪われた生命は同じなのに、法律はそれをわかってくれない。滉太が亡くなって初
めて知った、理不尽な刑事司法のシステム。加害者ばかりが法的には守られていて、「人
権」があり、被害者や遺族には「人権」がない。

それでも、滉太が亡くなった年の12月に「犯罪被害者等基本法」
が制定されて、少しずつ、犯罪被害者の人たちを社会で支えていこう、
という仕組みが出来てきたんだよ。私自身は、被害者支援都民センターに相談したり、地
域の人に支えてもらったりしながら、やっと今日までくることができたけど、滉太が殺さ
れて最初の一年は、本当に長い長い一年だった。孤立感と疎外感がものすごく強くあって、
こんな気持ちは「誰にもわからない」と思った。そのくせ人に会うのも、「可哀想な人」
って同情されたくなくて嫌だった。今では、なんとか、近所のママたちとも話せるよう
になったよ。人と話すときも疲れることもあるけど、泣かずに小学校にも行けるようになってき
た。お兄ちゃんは、滉太が入学するはずの年に、滉太のいない小学校に、一人で頑張って
通ってたんだから、私も頑張って行こうと思えるようになったよ。

滉太を知らない、妹。お誕生の時、私が悩みすぎたのか、妊娠中毒症になってしまって、
とても小さく生まれてきた彼女は、今ではその存在はとても大きいよ。それだけに、生ま
れかわりなんて無いんだと思った。彼女は彼女で可愛いし、滉太はやっぱり滉太で、たっ
たひとつの生命だった。

まだまだマグマのようにどろどろとした気持ち、会いたくて、抱きしめたくて、声が聞
きたいって気持ち、沢山の思いで苦しくなることもあるけど、滉太のたった一人の担任の
先生が、「滉太くんには「また明日ね」と言える大切さ、有り難さを教えてもらいました」
って言ってくれて嬉しかった。世の中の沢山の人がそう感じてくれたら、もっと優しい社
会が出来るのにね。

滉太、生まれてきてくれて、ありがとう。守れなくてごめんね。

～ 被害者支援都民センター(被害者支援都民センター自助グループ)発行の
遺族手記「もう一度会いたい・第8集」より ～

あの日あの時

高橋 美恵子

私には、中学2年の娘と小学6年の息子がいます。私は仕事、家事、育児にと毎日忙しく、充実した日々を過ごしています。

今、そういう日々を過ごしている未来があるはずでした。あの日あの時まで。

平成16年4月17日（土）、今日は朝からとても暑い。気温は既に25度を超え、庭で遊んでいる子供達は、暑そうに真赤な顔をしている。

午後2時からの子供達の体操教室へは、パパが車で送ってくれることになった。子供達は、車の後部座席の、いつものポジションにそれぞれ座り、水筒やタオルが入ったリュックサックを持って、元気に体操教室へと出かけて行った。「さあ、冷蔵庫が空っぽだから、私は買い物へ行かなくちゃ！」



スーパーへ着いて、買い物をしようと思ったら、私の携帯が鳴った。パパからだった。電話に出ると、パパがうわずった声で話始めた。「落ち着いて聞いて、事故に遭ったんだ。子供達が大変なんだ。すぐに病院へ来て。」予想もしていなかったパパの話に、全身から血の気が引いて、心臓がドキドキした。眩暈まです。とにかく気持ちを落ち着かせなくては、と自分に言い聞かせた。子供達は骨折か打撲をして痛がって泣いているはずだから、すぐに行っ

てあげなくちゃ。私は買い物もせずに店を出て、一旦家へ戻り、保険証や入院に必要な子供達の着替えをバッグに詰め込み、急いで病院へと車を走らせた。

やっと病院へ到着すると、そこには変わり果てた姿のパパが茫然と立ちすくんでいた。左腕は血だらけで、顔は紫色に変色して片目が見えないほど腫れ上がっていた。靴は片足しかはいておらず、もう片方は泥だらけのソックスという格好だった。あまりにも酷い状態のパパを見て慌てている私に、その場にいた救急隊員が「お子さん達は二人とも心肺停止の状態です。」と信じられない言葉を投げかけてきた。今まで張りつめていた心の糸がぷつりと切れて、私は立っていることもできず、その場にへなへたと座り込んでしまった。何が何だか訳がわからない。子供達の身に何が起きたの？ とにかく子供達に会いたい！ 顔が見たい！

私は、子供に会わせてほしいと嘆願したが、その願いは叶えてもらえなかった。その病院へは息子が搬送されていたが、治療中ということで、私達夫婦は病院の中へさえ、入れてもらえず、息子の姿を見ることすら許されなかった。

しかも、娘は、たった一人で遠く離れた別の病院へ搬送されているという事を聞かされた。

その時の私にできる事といえば、子供達の無事を祈ることと、一刻も早く娘の所へ行ってあげること、ただそれだけしかなかった。

そして私は不安定な精神状態のままハンドルを握り、教えられた病院へと向かった。泣き出したい気持ちを必死にこらえ、「死んじゃったらどうしよう、死んじゃったらどうしよ

う…」と何度もぶつぶつと独り言を繰り返しながら…。

なんとか娘が待つ病院へ辿り着いた私が案内されたのは、集中治療室ではなく、薄暗い霊安室だった。そこには、見たこともない着物を着せられた娘が一人ぼっちで寝かされていた。目の前の光景が私には全く理解できなかった。私の娘は死んでるの？ それとも娘そっくりの蠟人形が寝かされているの？ 口は少し開けているけど、目は閉じたままで、動かない。「まあさん、起きて！」呼んでも、身体をゆすんでもピクリとも動かない。

ぼっちゃりしてかわいらしいほっぺたに触ると、冷たくて少し硬かった。涙が溢れてきて止まらない。そこにあった椅子に座るように、看護婦さんに促されたけれど、力が抜けて座れない。娘の冷たい体に抱きつき、すがり付くことしかできない。

今まで、こんなにもリアルで恐ろしいドラマは見たことがない。これほどまでの悪夢も見たことがない。何なのこれは？



どの位の時間が過ぎたのだろうか。しばらくして、警察官が来て、「お母さん、これから二人の遺体を警察署へ運びますから。」と私に告げた。私はその言葉から、息子までもが、死んでしまったという事実を知る事になったのだ。

もはや私には、感情も感覚も無くなっていった。

唯一つ頭の中を駆け巡っていたのは「誰が子供達を殺したの？」という疑問だった。徐々に悔しさと怒りが全身に込み上げてきて、「誰が殺したのよ！ ちくしょう！」と何度も叫んでいた。激しい怒りと大量の涙のせいで、喉がカラカラに乾いていたことを強く記憶している。

子供達の命が奪われたのは、追突事故だった。赤信号の信号待ちをしていた私達の車へ、乗用車が80キロ余りの猛スピードで突っ込んできたのだ。私達の車は、追突された衝撃で前のトラックに激突。そして加害車両とトラックに挟まれ、原型を留めないほどぐしゃぐしゃに大破した。加害者は、64歳の高齢女性。事故原因は、アクセルとブレーキを踏み間違えたらしい。

あの日あの時から、私の人生は全てが変わってしまった。子供がいなくなっただけでなく、生活、仕事、人間関係、人格までもが変わり果ててしまった。

見ず知らずの他人に愛する子供を二人も殺されるという経験をしてからは、人間、社会など全てのものが信じられなくなってしまった。

誰も信用できないし、誰にも心を許すことはできない。明るく元気に振る舞い、辛かったことなど何もなかったような顔をして、生きていく方法しか思い浮かばない。苦しみは自分の心の中にだけ押し込めて、人には決して悟られぬようにして…。

今回は、被害に遭ったのが私達家族だったが、次はあなたかもしれない。全ての被害者がそうであったように、あの日あの時は、誰にでも突然にやって来るものだから。

～ 被害者支援都民センター(被害者支援都民センター自助グループ)発行の
遺族手記「もう一度会いたい・第8集」より～

突然「生命」を奪われた息子

成宮 和子

3人兄弟の末っ子、次男、「寛登^{ひろと}」（20歳）の突然の死から、今年で丸5年過ちました。

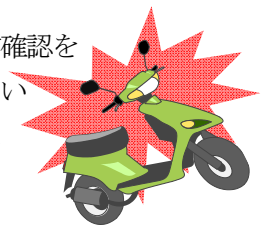
長いような、短いような、いろんな事がありすぎて、私の中では空白の時間が過ぎていったという感じです。

2004年5月31日、朝の9時半頃、消防署から「寛登さんはおたくの息子さんですか。交通事故に遭って、今病院に運ばれました。」という電話。30分前に大学へ行くため、元気に出かけて行ったのに「なぜ」と話の内容がつかめず、とにかくすぐに病院に来てということで、たまたま遅出で家にいた長男と、下着を用意して出かけました。長男の「こういう時こそ、いつも通りにしているのが大切で、きっと病院で寛登はすまなさそうに待ってるよ。」という言葉に、妙に納得したのを覚えています。

病院で、先生の所に行くまでの数分間、私は息子を捜しましたが、どこにも見当たらず、カーテンで仕切られた机の前に座らされた時初めて異常事態に気付かされ、トラックに跳ねられ亡くなったという事実を突きつけられ、現実のこととしてどう受けとめたらいいのか、頭の中が凍りつくような感じでした。

搬送されて来た時はすでに何の反応もなく、人工呼吸を30分程したが、逆に空気が体内にもれていくので、止めざるをえなかったという説明で、霊安室に寛登はいました。対面した息子の体はまだ暖かく、生き返るのではとほげしく揺さぶりましたが、床には血を拭き取った跡、つま先は冷たくなってきており、瞳は閉じたまま、何も出来ないんだという事がひしひしと伝わってきました。

事故は国道に面している日清工場の歩道のある出入口で、一旦停止、後方確認をせず急激な左折で侵入しようとした十トントラックが、原付バイクに乗っていた息子を前輪に巻き込み即死させました。心臓破裂、肺挫傷でレントゲンに写っていた心臓は直径1センチほどの塊になっていました。



その日の朝、大好物のシチューをおかわりして、出かけ際に玄関で「お弁当忘れた、持って来て！」と少し甘えたふうで「友達に免許を取って1か月位が事故を起こしやすいと言われたから気をつけるね。」と外まで見送ったのが、息子との最後です。

原付バイクに乗るにあたって、雨の日は乗らない、帰ってくる時は何時になるかを連絡するというルールを家族で決め、愚直なぐらい守っていました。

病院の廊下で警官から「息子さん、何も悪くないよ。」と言われ、遺品を取りに警察に行くと「加害者は今ここで取り調べを受けている」と教えてもらったのですが、即日釈放され、告別式に何も言わず参列していたことを後で知りました。

弟のために何か出来るのではと、必死にもがく長女について、弁護士探し、目撃者を探すための看板作りとただ後ろを歩きました。主人は霊前に座っては「ごめんよ。ごめんよ。」と泣き、長男は弟のために曲を作るといってギターを弾いているかと思うと、部屋に閉じこもる事が多くなりました。今思えば、残された家族がバラバラにならなかったのは、突然あの世に逝かされてしまった寛登の無念さを思うと、私達までつぶれてしまったら、寛登はあの世でどんなにつらく、悲しいだろうという思いだけでした。



刑事裁判では実刑が下りましたが、より息子の過失0をはっきりさせたいと民事裁判を起こしました。加害者側は息子が無理な追い越しをした所に原因があると言い続け、水戸地方裁判所龍ヶ崎支部で、「追い越しをしたと認めず過失0」の判決が出され、それを不服として控訴しましたが、高等裁判所でも判決の内容は変わりませんでした。第一審の証人尋問で、加害者は茶髪にし、事故当時から勤めていた運送会社のロゴの入った青いTシャツといういでたちで現れましたが、正面に座っている私達とは一度も目を合わせることなく、自分の立場を必死に弁明していました。

裁判に要した時間は四年半、寛登は私達と約束した通り、交通ルールを守っていたのが証明されたのですが、もう帰ってくることはないという現実と向き合って暮らしていかなければならない厳しさ、喪失感の中、一日一日が早く過ぎていけばよいという思いで過ごしています。

加害者は保険会社のいう通りに動き、一度も謝罪に来ず、被害者に謝りに行きたいということで横断囚として8か月で仮釈放されたと聞かされましたが、事故で20歳の若者を殺してしまった事さえ忘れていないのではないかと思います。

反面、遺族は「どう生きていかなければならないか」という課題と毎日向かい合いながら暮らしていかなければならず、世間に対しては必要以上に虚勢を張り、その反動でうつつつとしてしまうという事をくり返す日々が続いています。

～ 被害者支援都民センター(被害者支援都民センター自助グループ)発行の
遺族手記「もう一度会いたい・第9集」より ～

息子への思い

小畑 智子

最愛の息子、洋介を悪質な交通犯罪によって命を奪われてから12年が過ぎました。12年経った今も、息子を思わない日は1日ありません。

息子の命日である7月は、息子の友人たちが今も私達のもとへ訪れてくれます。結婚をして父親になった人達もいて、12年の歳月は社会の一員としての責任の或る32才の若者に成長させて、私達には眩しくさえ見えませんでした。私は全力投球で彼らの為に、私に出来る限りの手料理を作って振る舞います。自分でも考えられない程の力が入ります。彼らの姿に息子を重ねたひと時を過ごし、その後には虚しさだけが残ります。それでも、私は友人達に息子の事は忘れないで欲しいとの強い思いがあります。

将来の目標に向かって歩き始めたばかりの20才の息子でした。今頃どんな生活をしているのだろうか？山ほどやりたい事があった筈、本当に悔しい。そして息子のいない現実を受け止めた時、言葉にならない喪失感で胸が苦しくなるのです。

平成10年7月12日、泥酔状態の加害者は一緒に飲んだ友人達を乗せ、すでに物損事故を起こし逃げる最中でした。信号を無視して逆走し、息子を轢いてそのまま逃げ去りました。余りにも突然の事で、私は現実が受け入れられず、直後から感情麻痺が起こり泣くことも出来ませんでした。「なぜ？ どうして？」との思いがぐるぐると巡るだけで、当時の私は何も考えられませんでした。悪質な飲酒運転ひき逃げでも、当時の法律では業務上過失致死罪で、たった懲役2年でした。私の中では通り魔殺人と変わらないのに、なぜ過失なのか、そんな司法にも納得が出来ず本当に悔しくて何も出来ない自分を責めました。悶々として過ごす中、何気なく付けたテレビで、被害者支援都民センターを知りました。何とその日は息子の2度目の命日でした。その日から毎月カウンセリングをして頂き現実と向き会い、閉じ込めていた気持ちを話す事で、少しずつ感情を取り戻していきました。刑期を終えても何一つ謝罪のなかった加害者に対しての怒りが一気に沸きあがり怒濤のように激しくなっていました。

刑事裁判で加害者が「一生をもって償います」といった言葉はいったいなんだったのだろうかと思ひ出す度に、今も怒りがこみ上げてきます。

どんな謝罪をされても奪われた命は戻って来ませんが人間として謝罪は当然の事と思っていました。飲酒運転をしたあげく、ひき逃げをする人間など、もともと悪人なのだからそんな人間の顔も見たくないし、期待もしていないと夫はいつも言っていましたが、私の中ではそんな人間であっても人の命を奪ったのだから当然謝罪はあるものと思っていました。結

局、12年経っても1度の謝罪もなく、私は胸の奥に大きなしこりを抱えたまま暮らしています。果たして謝罪があったらそのしこりが消えるかどうかは分からない事ですが、少しだけ小さくなるかもしれません。

過ぎた日々を振り返った時、私には断片的な記憶だけしか残っていません。

今の私には、すべてが夢の中のように、自分の事ではないような気持ちにさえなる事があります。ある日突然、理不尽に愛する家族の命が奪われた時、人間の頭の中の状態は計り知れない衝撃があると教えて頂きました。ボロボロになっていく体の変調は実感しますが心の変調には自分自身でなかなか気付く事がなくて、自分から救いを求める事はないのではと思います。やはり私の頭の中もおかしくなっていたのだらうと今の私は思います。遺族の深い悲しみと苦しみが少しでも和らぐ様、早い時期にケアをして頂く為には被害者支援は絶対必要だと思います。

長い間、私は戦場へ行く侍のように硬い鎧で覆い、壊れそうな心は奥深くに仕舞い込んで壊れないように、いつも頑張っていたような気がします。

そんな中でも、支援センターでの自助グループは、頑張らなくてもいられる唯一の場所でした。辛く悲しい気持ちを吐き出す事はとても必要であったと思います。

すべてを受け止めてくれた自助のメンバーの方々や、いつも温かく見守って支援をしてくださった都民センターの方々に心から感謝をしています。

息子の死を無駄にしたくない。生きた証を残したい。そんな気持ちで生きてきました。息子の為に私ができる事は何か、いつも問いかけてきました。



悪質な交通犯罪がなくなる事！

微力ながらそんな活動へ参加させて頂けた事で私はなんとか、ここまで来る事が出来ました。悲しい気持ちは12年経った今も決して薄れる事はありません。

辛い事から逃げるように仕事だけに生きてきた夫も、年と共に体力も気力も衰えて仕事への頑張りも利かなくなりました。

夫と二人、残された人生をいかにして生きていくか、私達にとってこれからの課題です。

平成22年7月28日

～ 被害者支援都民センター(被害者支援都民センター自助グループ)発行の
遺族手記「もう一度会いたい・第10集」より ～



今思うこと

伊藤 秀子

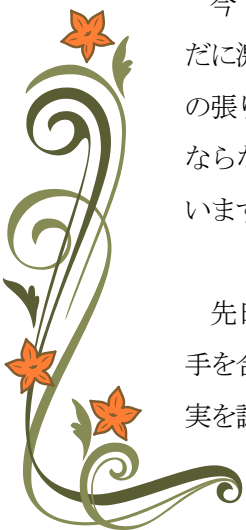
息子の覚は幼少の頃、草花が咲き始める季節になると、毎日のようにタンポポやつくしを摘んで来ては、仏壇に供えるやさしい家族思いの子供でした。そして、その屈託のない笑顔に、近所の人からは「いつもニコニコ顔で元気があっていいな」とよく言われたものでした。また、学生時代は陸上、スキーとスポーツにいそむ活発な一面もありました。夫は子煩悩で、地域の子ども達にも分け隔てなく接し、スポーツ大会等では、わが子のようにカメラのシャッターを切るような人でした。地域での人望も厚く、夫の小さなカメラ店には、いつも多くの方たちが集っていました。私は、そんな息子と夫の二人の命を一度に奪われました。私自身も二度にわたり心肺機能が停止する瀕死の状態、四ヶ月の入院生活を余儀なくされましたが、二人を失った悲しみを背負いながらの療養生活は、本当に苦しみの日々でした。



あの忌まわしい事件が起きたのは、辺りが薄明るくなる早朝でした。犯人は突然自宅に押し入り、磨かれた鋭利な刀を振り回し、容赦なく襲いかかるという残虐な方法で、尊い二人の命を奪いました。夫は抵抗する間もなく殺害され、息子も数十カ所を、顔、からだの原形を失う程メッタ刺しにされました。生き地獄のような中で、息子が最後に言った「お母さん、俺、大丈夫だから早く逃げて警察に連絡して・・・」という言葉が、今でも脳裏に焼きついており、犯人に対する憎しみが一層膨らんできます。事件当時犯人が無言のまま襲い掛かって来た事や、刀を振り回す力が並大抵ではなかったことから、日本人ではないと思っていました。ところが、あんな獣のような犯人がまさか、近所で付き合いのある家の息子だったとは、夢にも思いませんでした・・・。

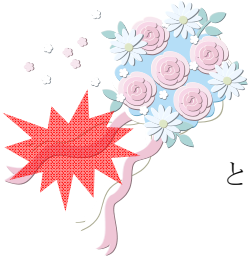
今でも、仏壇の二人の遺影を目にするたびに、あの忌まわしい事件のことが鮮明に蘇り未だに激しい恐怖と夫と息子を同時に亡くした悲しさ、悔しさ、そして無念さで涙が溢れ、胸の張り裂ける思いをしています。愛する夫、そして息子の写真を何故、仏壇に飾らなければならないのでしょうか。無言の二人を見て、切なくて、寂しくて、本当に辛い日々を送っています。

先日、三回忌の法要で、事件後上京するまで生活していた故郷に帰って来ました。墓前で手を合わせることさえ、私にとっては理不尽なことで、この世から二人が逝ってしまった現実を認めたくない気持ちで一杯でした。結婚を間近に控えていた息子は、第二の人生の夢と





希望を一瞬にして奪われ、愛する人を残してどんなに辛く、心残りだったことでしょう。その想いは計り知れません。また、夫は、結婚式という晴れ舞台上で息子たちの成長した姿に喜びをかみ締めたかったことでしょう。初孫を腕に抱き、目を細めている姿が見えるようです。こうして書いている今も、二人を想うと切なく、とめどなく涙が流れてきます。



なぜ、私たち家族がこのようなひどい目に遭わなければならなかったのでしょうか……。事件当時、瀕死の状態であった私は、医師や看護師、大勢のスタッフの方々の手厚い治療と看護を受けましたが、利き手の右手に障害が残っています。また、心の病も患い、治療を続ける生活を送っています。多くの方々に支えられ、命を奪われた二人の分まで強く生きていかなければ……。と思うのですが、一方で自分だけが生き残ったことに、自責の念に駆られ、気持ちだけが焦り、なかなか新しい一歩を踏み出すことが出来ずにいます。

事件現場となった自宅は住める状態ではなく、現在は解体し更地になっています。ずっと同居していた93歳の義母も、息子と孫を同時に亡くすという、耐え難い苦痛を強いられた上、家族が離れ離れに生活せざるを得ない状況におかれ、家族皆が一変してしまった環境に戸惑いながら生活しています。また、息子の最愛の婚約者も、生まれ育った土地を離れざるを得ない状況になってしまいました。テレビや新聞等での過剰な報道や好奇の目に耐え難かったのでしょうか……。

このように、ひとつの犯罪による被害は止まるところがありません。本当に多くの人達の人生を一変させてしまいました。

近年、犯罪被害者の人権に対する社会的関心も高まっていますが、罪を犯した加害者が法により守られ、被害を受けた人たちが、苦しみを抱えながら生きていかなければならない現状には疑問を感じます。例えどのような理由があろうとも、人の大切な尊い命を奪うことは、決して許されることではありません。しかし、一審の判決は加害者の一方的な証言と人権を考慮したもので、遺族の望む結果ではありませんでした。これから二審を迎えるにあたり、せめて、公判の中で、二次的、三次的被害を受けることなく、真に適正な判決が下されることを願っています。



～ 被害者支援都民センター(被害者支援都民センター自助グループ)発行の
遺族手記「もう一度会いたい・第8集」より ～

未解決の今を生きる

後藤 リウ

平成17年2月14日の夜の事です。当時39才の息子は、信用金庫に勤務しておりました。残業を終えて同僚と2人で、帰ろうとドアを開けたところで、何者かに襲われ刺殺されてしまいました。何がおきてこんな恐ろしいことになってしまったのか、何もわからぬまま、早4年余りの歳月だけが空しく過ぎ去り、もうすぐ5回目のお盆がやってきます。お墓に花を手向けても、息子にかけてやる言葉もみつからぬまま……



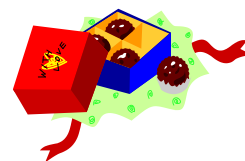
その夜「お母さん大変。パパが会社を出たところで、何者かに襲われ、救急車で病院に運ばれた。」とママからの知らせを受け、取り急ぎ病院にと急いだ。気持ちが急ぐのでその道程は遠く、ただ只管ひたすらに息子の無事を祈り、心の中で「博樹、頑張って。」と叫び続けていた。

やっと着くと、警察の人、救急車の人、会社の人達が待っていて下さった。博樹は手術中のことで、落ち着かぬまま待っていると、搬送して下さいた人から、息子の状態について説明があり、「会社を出たところで、知らない若い男にやられた」ことや「家族に救急車で病院に行く伝えて下さい。」とたのんだことなど、これ以上話すと身体に障ると思いつめたこと、そして一時心停止を起こしたことも伝えられ、初めて命にかかわる深刻な事態であることを知り、頭の中が真っ白になった。

何も考えられない中、次男と娘に連絡を取り、どのくらいの時間が過ぎたのか、皆が駆け付けて間もなく先生が、手術を終えて来て下さった。「先生」と言って駆け寄ると、「出来るだけのことはしましたが……。」と言われ目を伏せられた。「えっ。」息子に何が起きたのだろう。全身の血の気が引き、「先生助けて下さい。助けて下さい」と懇願したが先生の顔色は曇ったまま言葉はなかった。「じゃあ会わせて下さい。」と頼み案内されそこで目にした息子は、頭から顔、首迄赤く血の滲んだ包帯だらけの姿で、目を閉じベットの上に横たわっていた。ママは、「パパ、パパどうしたの、しっかりして。」と泣き叫び、私は「博樹しっかりして頑張るんだよ。」と力をあげようと手を握りしめた。その手がまだ温かいのに、「ご臨終です」と告げられ、ママは「嘘だよ、パパが死んだなんて嘘だよ。」と泣きくずれ、私は「博樹が死んだ？ 死んだ」何が起きたのか理解することも出来なかった。

息子の命が消えゆくというのに、助けてあげることも、代わってあげることも出来ず、只呆然と立ちつくし、まるでテレビの中のシーンを見ているような気がした。つい三日前、お

じいちゃんにチョコレートを、家族3人で届けに来てくれ、会ったばかりの息子とは、とても信じられるものではなかった。



一度きりの人生を、息子はこんな形で終わらされてしまった。愛し慈しみ大切に育ててきた掛け替えのない命を、どこの誰かもわからぬ奴に一瞬にして奪われてしまった。この悔しさ、怒りをどこに打つ^ぶ蹴^ければよいというのでしょうか。一生懸命頑張って生きてきた息子の心中を思うと、胸が張り裂ける思いが致します。

今だ犯人も見つからず、未解決のまま悶々と時を過ごし、寝ても覚めても、片時も頭から離れることはありません。私はあの日、あの時で時間が止まってしまいました。一步も前に進むことが出来ず、「何で？」という思いで始まり終わってしまう毎日です。

犯人は今どこでどう暮らしているのでしょうか。他人の人生を根刮ぎ倒し、滅茶苦茶にして、自首することもなく、期限迄捕まることなく逃げ通せば、現在の法律では時効成立というご褒美をくれる。それを待っているのだろうか。人を殺したものに逃げ得など、絶対許す訳にはいかないのです。もっともっと生きたかった命です。子供の成長も見届けることも出来ず、殺されてしまった息子の無念の思いだけは、何としても晴らしてあげなければ何の為の人生だったかわかりません。

今犯罪被害者や、世論の声を聞き受け法務省で、時効廃止についてご審議いただいている最中かと思います。ご審議下さる皆様方が、我が身、我が愛する家族に起きたことと、置き換えて考えて下さるなら、必ず時効廃止、そして現在進行中の事件も遡及していただける法律に変わるものと確信しております。

事件発生以来、ほんとうに一生懸命捜査に当たっていただいております警察の皆様方に、心より感謝申し上げます。今後は大変でしょうが一日も早く解決していただきたく、お願い申し上げます。

出口の見えない暗いトンネルの中を、さ迷い続けた私に、ほっと心の居場所を与えて下さった支援センターの皆様、そして自助グループの仲間達に支えられ、多くの人達に助けられ今こうして生きていられることに、感謝したいと思います。

～ 被害者支援都民センター(被害者支援都民センター自助グループ)発行の
遺族手記「もう一度会いたい・第9集」より ～

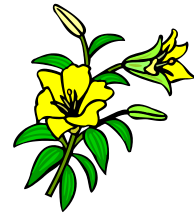
人権救済すべきは加害者か、被害者か

糸賀 美恵

2002年長男を、うつ病で自殺願望のある当時元交際相手に寝ているところを殺人目的で準備した刃渡り20センチものサバイバルナイフで10数か所刺され、25歳の命を奪われるという殺人事件の被害者遺族になって8年の月日が流れました。

息子がこの世からいなくなったという現実に向き合えるようになるまで約2年もの時間がかかりました。8年たった今でもひょっこり私の前に戻ってくるのではないかと、戻ってきて欲しいと、願う日が続いています。

周りの息子の友人が結婚したり、子供が生まれたり幸せな家庭を見るたびに、息子も生きていたら今ごろこんな幸せな家庭を築いていた事だろうと思うと、また苦しい現実に戻される事が続いています。生きているかぎりずっとこんな思いが続くのでしょうか。



安全安心であったはずの日本が、毎日のように事件、事故、自殺等で尊い命が失われています。大きな事件ではマスコミも取り上げますが、亡くなった被害者が1人だと世間にも知られることなく終わってしまう。事件でも事故でも自殺でも被害者遺族が声を上げなければ、数多い事件の中のひとつだと簡単に処理されてしまう。奪った命の数ではない。

何の罪もない人間の奪われた命が1人であっても遺族にとっては、奪った加害者には命で償って欲しいと望んでいるのです。

ところが、刑事裁判では、生きている被告人の人権救済のためには被告人を精神障害者にしてまで犯した罪を正当化し、生育環境のせい、社会のせいとし、弁護士は減刑を求めます。量刑を軽くする事が弁護士の仕事ではなく、被告人に真実を語らせ、犯した罪に正面から向かい合わせ反省させることが本来の裁判のあるべき姿なのではないでしょうか。

国は罪を犯した犯罪者に大量の税金をつぎ込み刑務所で保護するのです。その為犯罪者も刑務所に入った事で、罪を償ったととんでもない勘違いをして、反省していないにもかかわらず、遺族がずっと生きている限り苦しんでいる事など考えもせず、世の中にまいもどって来る犯罪者が少なくないと感じます。刑務所に入る事が罪を償うという事ではありません。殺された人は二度と戻ってくる事ができないという事を忘れてはならないのです。

一方被害者や遺族は突然の被害に遭ってから精神的、経済的、家族や周りとの人間関係までも崩壊されて被害に遭うまでの生活に戻れない人が少なくありません。

遺族ばかりでは無く、特に性犯罪、傷害事件、いじめのような生存している被害者も同じように苦しみと闘いながら生きているのではないかと思います。

加害者の人権救済をする前に被害者や被害者家族の人権救済をする事が基本的人権の基礎ではないかと感じますが、なぜ侵害された被害者の人権より加害者の人権を守ろうとするのでしょうか。なぜ被害者の人権より罪を犯した加害者の人権の方が尊重され、守られるのでしょうか。

警察は犯人を逮捕する事が仕事、裁判は被告人の量刑を決めて刑務所へ送れば一件落着。しかし被害者にとっては裁判が終結ではありません。

事件から2年後被害者支援センターを知り、多くのスタッフ、支援者、自助グループの仲間とめぐり合い、苦しいのは私一人ではない、たった一度の人生を無駄にしてはいけない、と思えた時から前を向いて生きていく事ができるようになりました。

残念な事に事件や事故が全くなくなるということはないと思います。

これから先不幸にも被害に遭った人達には私達のような辛い思いをさせたくない。その為にも被害者支援の重要性、「命」の重さを他人事と思わずに多くの人に考えていただきたいと願っています。そして被害に遭ってから苦しみながら生きている被害者に国や自治体、被害者の周りの方々、そして特に司法関係者から二次被害を与えられる事無く、早い時期から支援を受けられるような世の中になることを被害者の一人として望んでいます。



今私にできること

清水 恵子

『直は結婚してもずっとお母さんと一緒に暮らす。お母さんが歳をとっておばあちゃんになったら今度は直が面倒見るでね。長生きしてよ。』

と言ってくれたのは、事件の数ヶ月前のことでした。

中学生になってもこんなに優しい、可愛いことを言ってくれる娘でした。

たった13年という短い人生でしたが、私の娘として生まれてきてくれたこと、娘が私たち家族にくれた幸せ、残してくれた暖かい心は今も私の心の中に生きています。しかし、事件現場となってしまった建物も取り壊され、事件が風化していつてしまうのを感じます。

平成18年4月19日、朝いつものように「行ってきまーす！」と学校のジャージにリュックを背負い、元気に走っていった姿が最後でした。

私のかけがえのない大切な娘は、たった一人の少年の身勝手な思いで、一瞬に、残虐に、全てを奪われました。私たち家族の幸せも、将来も、普通の生活も、何もかもが奪われました。かわいい笑顔、笑い声、私たち家族にくれた優しさ、楽しかった思い出。どれを思い出しても悲しくなってしまうばかりです。

加害者は当時15歳の少年で、二つ年上の兄の友人でした。娘が発見された日に逮捕されましたが、犯行当日から逮捕される日まで普通に学校へ行き、家族と外食や、カラオケを楽しんでいました。私たち家族や警察が捜しているのを知ったときも「直、どこにいるんだろうね」と一緒に探す振りをしていました。少年は逮捕後、傷害致死を主張して、殺すつもりはなかったと言いましたが、何一つ口論にもなっていない無抵抗の娘に対し、顔を殴り、首を絞めて、止めを刺すために、頭を角材で何度も殴り、死んだかどうか確認するために手首まで切った。そしてその遺体の横でかばんをあさり、財布まで開けている。遺品となって返ってきた娘の財布の中には十円玉が4枚、そしてファスナーの内側には血痕がありました。私たち遺族からすれば、強盗殺人だと言わずにいられません。

三日間も暗い寒い廃墟に放置されたことを思うだけでも胸が締め付けられる思いですが、加害少年の供述調書に書かれていた、我が子の最後の言葉、残虐に次から次へ傷めつけられる暴行の内容、意識が無くなっていく娘の様子を、知れば知るほど、どんなに怖かっただろう、痛かっただろう、苦しかっただろうと、本当に言葉には表せない思いです。どうして私は生きているのだろう、何でご飯なんか食べているんだろう、守ってあげられなかった、助けることが出来なかったと自分を責める毎日です。

少年審判の結果は保護処分となり、三年以上の少年院送致となりました。私たち被害者側の代弁者もなく加害者側だけの密室での審判で罪の重さを決められても、受け

入れることはできません。

そして、もうその三年という月日が過ぎました。

加害少年は社会に復帰して人生をやり直すのです。謝罪もなく、刑罰も与えられず、賠償責任をとらなくても、また自分の人生を生きられるのです。

私たち被害者遺族は、どれだけの日日が経とうと、悲しみが癒えることもなく、加害者に対しての憎しみも薄れることはありません。そして、どれだけ願っても娘は帰ってきません。

加害者は名前も顔も明かされず、犯行の動機も『少年の更生の妨げになる、少年の人権を守るために。』と、すべてが少年法で守られました。

しかし、被害者は13歳になったばかりの少女にもかかわらず、名前も顔も明かされ、まったく身に覚えの無い事実無根の報道が何度も繰り返されました。

事件報道では、交際相手とされていたが、少年と交際していたのは別の子です。あるテレビ局の取材で、マイクを向けられた見ず知らずの人が「何回も家出を繰り返していた子で、犯人と一緒に家出したこともあるらしい。」と話していました。

タクシーの運転手が警察署から私と娘を乗せたとき、万引きをした娘を私が叱っていたという記事もありました。犯人とどこか娘は家出をしたことなど一度もありません。万引きなどの非行事実で補導されたこともありません。娘と二人でタクシーに乗ったことすらありません。娘は毎日の出来事をブログに書いていました。

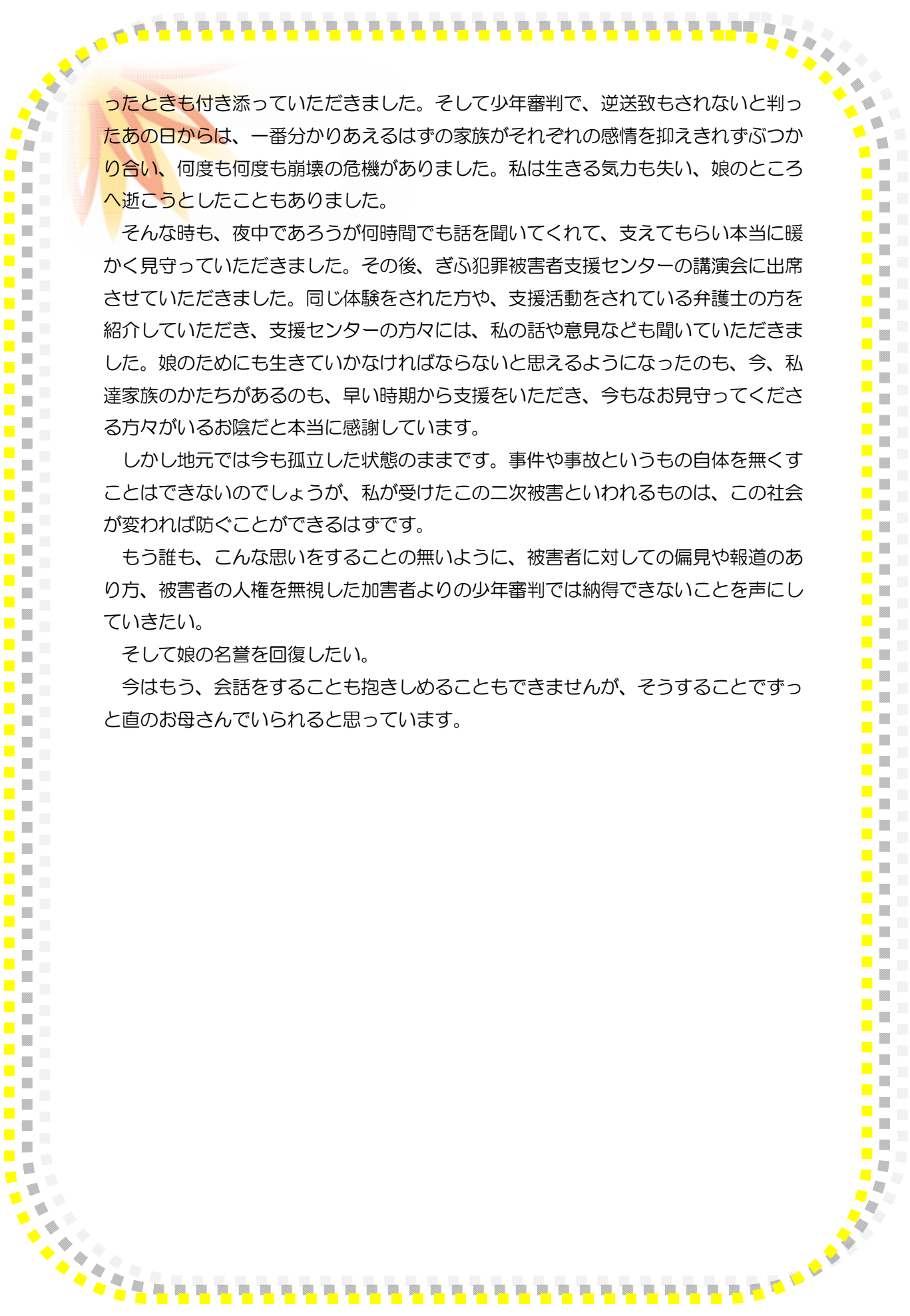
事件の10日前のブログに家族や友人とお花見に出掛けたことを書いていました。お花見をしていた公園の中で私の友達が、原付バイクの後ろに娘を乗せて遊んでいました。そのことを「バイクに乗せてもらった。楽しかった～。まあくんありがとう。」と書いていました。それを、『深夜に暴走族とバイクを乗り回していた』と報道されました。

被害者である娘は、数日の間にまったく違う人格にされていました。

地元では娘と私たち家族を中傷するひどい噂話ばかりでした。まるで娘の方が悪いことをしたような言われ方で愕然としました。娘はもう、身に覚えの無いことを噂されても、否定することも涙を流すことも出来ません。私は家から一歩も出られなくなり会社も辞めました。なぜ被害者がここまで苦しめられるのでしょうか。

現実を受け入れるだけでも苦しい時期に、多くの悩みや不安、恐怖に襲われました。感情をも失い誰を信じればいいのかと絶望しました。

そんな中、唯一私が信頼して心を開くことができたのが、当時中津川警察署で生活安全課の課長を務められていた方と、岐阜県警の被害者対策室の方でした。私がおの方々に心が開けるようになったのは、事件当初からずっと私たち家族を見守ってくれたからです。事件が起こった日、娘の変わり果てた姿に対面したときも、マスコミに追われ自宅に帰れないときも、司法解剖が終わりやっと娘が自宅に帰ってこられたときも、通夜、告別式も、ずっと傍にいてくださいました。裁判所へ意見陳述に行



ったときも付き添っていただきました。そして少年審判で、逆送致もされないと判ったあの日からは、一番分かりあえるはずの家族がそれぞれの感情を抑えきれずぶつかり合い、何度も何度も崩壊の危機がありました。私は生きる気力も失い、娘のところへ逝こうとしたこともありました。

そんな時も、夜中であろうが何時間でも話を聞いてくれて、支えてもらい本当に暖かく見守っていただきました。その後、ぎふ犯罪被害者支援センターの講演会に出席させていただきました。同じ体験をされた方や、支援活動をされている弁護士の方を紹介していただき、支援センターの方々には、私の話や意見なども聞いていただきました。娘のためにも生きていかなければならないと思えるようになったのも、今、私達家族のかたちがあるのも、早い時期から支援をいただき、今もなお見守ってくださる方々がいるお陰だと本当に感謝しています。

しかし地元では今も孤立した状態のままです。事件や事故というものの自体を無くすことはできないのですが、私が受けたこの二次被害といわれるものは、この社会が変われば防ぐことができるはずです。

もう誰も、こんな思いをすることの無いように、被害者に対しての偏見や報道のあり方、被害者の人権を無視した加害者よりの少年審判では納得できないことを声にしていきたい。

そして娘の名誉を回復したい。

今はもう、会話をすることも抱きしめることもできませんが、そうすることでずっと直のお母さんでいられると思っています。

平成10年7月25日、和歌山市園部で起きた事件で10歳で命を奪われた林大貴（ひろたか）君のお母さん・有加（ゆか）さんが、不意に会えなくなった大貴君の声を聞く作品に作り上げられた童話「彼岸花」をご紹介します。

「彼岸花」

ある年の7月
10才の少年の命の灯が消え、
ひとつの魂が
生まれました。

短い命から生まれた
小さな小さな魂でした。

その小さな魂は、
母が恋しくて、
神に、
もう1度だけ
母に会わせてほしい
と頼みました。

神は、
その純真無垢な魂を不憫に思い、
願いを聞き入れてくれました。
そして、神は、
こう言いました。

「1日だけ、
おまえを人間界にもどしてあげよう。
ただし、人間の姿では
もどれない。
母が、おまえの姿を見つけ、
母の声を聞くことが出来たなら、
いつか再び、親子として
人間界に生まれかわることを許そう。

しかし、
母の声を聞くことが
出来なかった時には、
魂は、消えてなくなってしまうが、
それでもよいか？」

小さな魂は、9月半ば、
母との思い出深い
彼岸花の姿をかりて、
母の住む家の近くの土手に、
ひっそりと咲きました。
なつかしい家の窓には、
悲しげに



外を眺める
母の姿がありました。

精一杯、健気（けなげ）に咲く一本の
赤い彼岸花に目がとまったのでしょう。
しばらくすると、
母は、
引き寄せられるかのように
ゆっくりと
土手の方に近づいてきました。

そして、
母は、
彼岸花に顔を近づけ、
語りかけました。

「もう、彼岸花の季節になったのね…。
ひろくんは、いつも
お母さんのために、
このお花を摘んできてくれたよね。
ありがとう。」

母の目から涙がこぼれ落ち、
声にならない声を
ふりしぼって言いました。
「ひろくん、おかえりなさい。」
そう言って、
花をやさしく
手で包み込みました。

なつかしい
母の
声とぬくもりでした。

その母の
やさしい声を聞くことが出来た瞬間、
<お母さん、ただいま！
いつかまた、
きっと、
お母さんの子どもに
生まれてくるからね。
ありがとう、
お母さん！>

彼岸花は、母の言葉と、
いく粒もの涙を花びらで受け止め、
ひとすじの光となり、
空に昇っていきました。

母は、
空を見上げ、
いつまでも
祈りつづけました。

